

# 地域性を活かした魅力あるきゅうり経営の推進

## ■背景とねらい

当支援センターでは、令和2年度までの3年間「果菜類の施設化と連作障害対策による生産力向上」を重点活動課題として掲げ、きゅうり露地作型への施設化推進を図り、当初約50%であった夏秋作型における施設化率は約60%へ向上した。

一方で、ネコブセンチュウ類及びホモプシス根腐病等の連作障害については、土壌くん蒸剤が有効であるが、栽培者は使用する意欲が低い。

そこで、令和3年度からは「地域性を活かした魅力あるきゅうり経営の推進」と題して、産地の更なる発展を推進することとした。

結果、令和3年度は養液栽培（有機培地入りブロック状袋栽培）において、20t/10aの単収確保が可能である。養液栽培に関心の高いきゅうり栽培者は多いが、初期投資が大きいため9割の農家が導入に踏み切れない傾向を把握した。また、「きゅうり＋市田柿」の経営モデルを作成した。

「電子図鑑」を作成し、農業農村支援センターのホームページに掲載し、新規栽培者へ活用を促した。

7人の重点対象者を新規きゅうり栽培者の中から選定し、毎月1回以上巡回し課題解決を支援し、5人が目標収量を超えた。この巡回時に「きゅうりニュース」を配布し栽培の一助とした。6月に青空教室、11月に成果交換会を開催し、新規栽培者の生産性向上を図った。

## ■本年度の取組

### 1 産地強化に向けた新たな経営モデルの提案

養液栽培では「つる下ろし」栽培で管理されるが、つる下ろしの作業時間が膨大であり面積拡大の阻害要因である。試験場で開発した「更新型つる下ろし栽培」の有効性を現地確認した。また、園地確保が困難となりつつある市田柿に変えて「きゅうり＋ねぎ」の経営モデルを作成すべく、ネギの経営実態把握を4戸で行った。

### 2 ICT活用による生産安定

「電子図鑑」の充実を図るため、重点対象者巡回時に病害虫に加えて「生理障害」の画像を収集し、図鑑に加えた。また、成果交換会の折に図鑑活用に関するアンケートを実施した。

### 3 担い手の育成

就農5年以内のきゅうり栽培者から重点対象者を8名選定し、担当者を定め、毎月1回以上巡回し、目標収量達成を支援した。

青空教室及び成果交換会を開催し、栽培レベルの向上及び作業の効率化を図った。

## ■本年度の成果

### 1 産地強化に向けた新たな経営モデルの提案

養液栽培において、品種ニーナにて更新型つる下ろし栽培に取り組んだが、生育が旺盛で管理作業時間の短縮を確認できなかった。

ネギとの複合経営における経営モデルを作成した。また、市田柿との導入手引書を作成した。

### 2 ICT活用による生産安定

野菜花き試験場の協力も得、5種類の生理障害画像を収集し、「電子図鑑」の拡充した。JA担当者へ顕微鏡を使った病害判定研修も行った。

### 3 担い手の育成

8名の重点対象者を毎月巡回し、6名の対象者が目標収量を上回った。

青空教室1回（病害虫防除）及び成果交換会（本年の反省及び選果作業のカイゼン等）を1回開催した。受講生からは好評であった。

## ■今後の課題と対応

養液栽培は液肥原料の輸入が不安定であり、当面導入は不可能である。市田柿あるいはネギとの複合経営手引書を作成し、新規就農希望者へ配布する。電子図鑑の活用を更に推進する。

重点対象者を新規に7名選定し、目標収量確保を目指し、毎月巡回する。

（技術経営係：吉川 昭）